

# 『戦闘』

アンゲルウルプの戦闘は、それからまもなく終了した。

執政宮殿をまっすぐ目指してきた飛行部隊と違い、地上から侵攻してきた鬼子たちの部隊は、アンゲルウルプの殺戮と破壊に熱中した為に半ば廃墟と化した市街地でモタモタしていた。

そこへ準備を整えた重装騎士たちが迎撃してきたのである。

いくら個別の戦闘力に優れていても二十体そこその数しかおらず、援軍も見込めない集団だ。

先行した飛行部隊が全滅した時点で撤退すべきであったのに、

それを命じる者すらいらない烏合の衆でしかなかったから、勝敗は明らかだった。

ただポルメリアの視界には別のものが映っている。執政宮殿にいる貴顕たちとは異なり守るべき術を持たない人々の死骸だ。

彼らはアンゲルウルプのもともとの住民ではない。戦乱や飢饉で故郷や家族を失い、生きていく術を失った流浪の民だ。

半ば以上廃墟となったアンゲルウルプだが雨露をしのぐ屋根や庇には困らない。

そうやって一時の休息をここで得たというのに、難民である彼らは、またも戦いの中で危険に晒され、命を落としたのだ。

そしてその事に心を痛める者はいても、彼らを守る義務を負った者は、この街にはいない。

諸侯に従ってやってきた騎士や魔術師たちは、

自分たちの主君を守る義務を負っているが、アンゲルウルプの防衛に責任を持つ訳ではない。

都市魔術師であるフィスエシルとその弟子達はアンゲルウルプ中枢を守る術を持つが、

許可もなく入り込んだ難民全てに目が届く訳ではない。

そしてもともとアンゲルウルプに住まう住民たちにとっても、流浪の民はよそ者だ。

私は何処にも属さない。ただ善なる軍神にのみ仕える者。

その軍神からのご指示がない今、私の行動を縛る者は何処にも存在しない。

ポルメリアは無残な亡骸を見下ろしたまま、凱歌を上げる騎士たちの声を聞いた。それは余りにも彼女には遠い喜びだった。

神が私の行動に何のお言葉もかけくださらない。それは軍神が私の行動を容認して下さっているからなのだ。

先ほど姉が軽く言い放った言葉が彼女の頭の中で駆け巡る。ポルメリアは善なる軍神以外、誰にも属さない。

ランキンを出奔して以来、いかなる諸侯にも仕えない、領地を持たない独立した騎士だ。

神が何の指示も与えないならば、彼女を縛るものは何処にも存在しない。

彼女は彼女の意思で時と場所と、戦う相手を選べるのだ。

ポルメリアが倒した巨人の鬼子の辺りで、騎士たちが冗談を言い合っている。

彼女の耳にそれはもはや入らなかった。スカートのようなサーコートを鞭のように翻し、彼女は執政宮殿へ向かった。

ここは私が戦うべき戦場ではない。私が戦う場所は、私自身が決める。

それをフィスエシルと姉に告げなければならない。そして悪魔との戦いに赴くのだ。

何の為に？

執政宮殿へ向かう道すがら、瓦礫の下敷きになっている幼い手、やせ細った汚れた手を見た。

彼女の唇が音を立てて引き締まる。

決まっている。誰にも守られぬ、  
守る術を持たぬ人々の為に、私は剣を取る。それこそが我が定め、我が人生なのだから、と。

「え、もう立つの？急な話ね」

身支度など簡単だ。その荷物を持って姉ペルペティアの宿舎に向かう。

彼女は他のランキン侯爵に従う神官たちと一緒に、戦いに参加したランキン侯爵騎士団の騎士たちの傷を癒していた。何人かの騎士はボルメリアを見知っている。敬して近付かずが彼らが決めた態度のようだ。誰も姉妹の会話に近付いてこない。

「私が何故、ランキンを飛び出したのか、遅巻きながら気付いたのです。私は誰にも守られぬ人々の為に戦わなければならない。だから、ここで会議の成り行きを見守る事はできないのです。私は私の戦場へ向かいます」

揺るぎのないボルメリアの藍色の瞳を見て、同じ瞳の色を持つペルペティアは溜め息をつきながら苦笑した。

「ほんと、生真面目でせっかちなのねえ。生き別れの姉妹がやっと会えたのに、半日でもう別れなければならないなんて」

「すみません・・・でも・・・」

「ううん。解っているわ。たぶん、私が貴女の立場でも同じ事を考えて実行する。

それに、私がけしかけたようなものだね。『神さまが何も言わないのは、それを許しているからだ』なんて。

貴女が出て行った後、私、エニシエドに怒られたわ。そなたは余りにも軽薄だって、さ」

「すみません」

「いいのよ。自業自得だし、エニシエドだって褒められたものじゃないわ。

貴女をどうにかしてランキンの指揮下に入れたかったのだから。

三年もほったらかしにしておいて、大戦が始まるから呼び寄せて思い通りに使おうなんて、虫が良すぎるわね」

ころころと笑うペルペティアにボルメリアは返す言葉もなく、困ってしまう。それを見てペルペティアはまた笑った。

「ねえ、貴女、親しい人にはなんて呼ばれているの？」

「孤児院の子供たちにはポリーと呼ばれています」

「そう。ではポリー。今度会う時は私の事はティアって呼んでちょうだい。

これから色々大変だと思うけど、ちゃんと、しっかりと生きていくんだよ。

生きていないと私たちは神様から与えられた使命をまっとうできないんだもの。ちゃんと生きて、また会いましょう」

ペルペティアの手がボルメリアの手を包み込んだ。別れの抱擁はボルメリアの方が求めた。

ペルペティアの言葉にボルメリアはちゃんとした返事をする事ができず、

胸が一杯になり、ただただうなづき返すしかできなかった。

「またね、ポリー」

穏やかに笑って姉が言う。

「いずれまた、ティア」

泣き笑いながら妹が言った。

それが双子の姉妹の別れだった。

フィスエシルの方はなかなか捕まらなかった。

アンゲルウルプ防衛の責任者としてやるべき後始末に追われているようにも見えるのだが、しかしボルメリアは彼女の方が別れを避けているように思えた。

あの人はかなりずるい人だから、そういう事もするのではないかと思ってしまう。

しかし出発を先延ばしするつもりがまったくないボルメリアは、彼女の弟子に伝言してすぐさま旅立とうとした。ところが、そういう矢先になってフィスエシルは顔を出すのだ。

不機嫌そうな彼女は、悪戯がばれて観念した子供のような顔をしていた。

「・・・行くね」

「は？」

「ちっ、天使の眷属なんて珍しいから、手元に置いておきたかったのになあ」

「・・・ひょっとして今までの事は全て・・・」

「そういうこと」

つまり、戦略がどうのとか、諸侯の事を知っておけとか、そんなものは全ていいわけに過ぎず、

ただ単にボルメリアを自分の下に止めておく為の方便だったという訳だ。なんとも自分勝手な事だ。

しかもそれが失敗したのはボルメリアのせいだと言わんばかりの態度である。

ボルメリアにしてみれば無駄な足止めをくらったのだから怒ってもいい筈だが、しかし彼女は微笑しか浮かべなかった。おかげで生き別れの双子の姉にも会えたのだし、自分がすべき事を再確認したのだから、全てが悪い訳ではなかった。

「貴女を責めるつもりはありません。ですから、快く私を行かせてくださいますね？」

フィスエシルは不機嫌なままだ。そして、ふいつと横を向いてしまった。

「アンゲルウルプで私の護衛でもやっていれば、それなりの待遇が与えられるのに」

「でもそれに甘んじる事は、私にはできません。それができるくらいならランキンを出奔したりしなかったでしょう」

ボルメリアの言葉は静かだが揺るぎないものだった。何者も彼女を動かす事はできない。

彼女は既に決めてしまっていた。フィスエシルは諦め顔で両手をあげるしかなかった。

「解ったわ。もう貴女を引き止めるのはやめましょ。で、何処へ向かうの？」

「ケルマデイクへ。あそこは私の、第二の故郷のようなものです」

「王国自由都市か。あそこはアンゲルウルプほどじゃないけど、きちんと防衛を整えている都市よ。豊かな商業都市だもの。もしかしたらアンゲルウルプよりも堅固な守りを備えているかも」

「しかし、それはテラムリア・・・『天使王国』内での敵に向けられた備えでしょう。」

悪魔は次元の異なる敵です。悪魔相手ならばアンゲルウルプの方がよほど守りが固いと、私は先ほど実感しましたが」  
フィスエシルの顔色が青くなった。

「ひょっとして貴女ごと電撃で敵をなぎ払った事、怒っている？」

「いえ。結果として私は囹の役をこなせたのですし、私自身あれには助けられました。

しかし、だからこそ、ここでの私は必要不可欠ではない。どうぞ、私をケルマディクへ行かせてください。

あそこには、私が守るべき者がいるのです」

ポルメリアの言葉を聞いているうちに、再び面白くなってきた様子のフィスエシルは、膨れた顔でそっぽを向いた。

「私は守るべき者じゃないのね」

「フォリヴァス公が守ってくださいますよ」

「そうね。『天使王国』の王冠を得る為にね」

「それでも、貴女には守られるべき価値がある。私が守らなければならないのは、諸侯が守る価値を見い出さない人々です」

「弱き者の為に戦うのね。見返りはないのよ」

「それが私の人生ですから」

彼女の声があまりに静かなので、フィスエシルは驚いてポルメリアの顔を見直した。

そろそろ十六になろうとする彼女の顔はまだ幼い。

しかし穏やかで、落ち着いていて、その雰囲気はとて十六歳の少女のものではなかった。

彼女はもう決めたのだ。それをくつがえす事はできない。フィスエシルはそう悟って頭を掻いた。

「人生と言われたら、何ともいいようがないわね。私からするとつまらない人生だと思っけど、貴女はそれで満足なのね」

「少なくとも、双子の姉とケルマディクの子供たちは理解してくれます。

かつて一緒に旅をして死んでしまった仲間たちも。私は孤独ではない。

私のやる事に何のお言葉もかけていただけなのは、

軍神も私がする事を認めていらっしやるのでしょうか？間違っていたなら正してくださいますよ。

だから私は、私の信じる道に命をかけます。それが私の人生ですから」

もう一度フィスエシルは頭を掻いた。澄み切った顔のポルメリアを見つめて、面白くなさそうな顔をしている。

そして結局溜め息をついて言い放った。

「解ったわよ。何処へでも行きなさい。

たった数十年の人生を他人への、見返りなしの奉仕で過ごすなんて私には考えられないほど勿体ない話だと思うけど！」

エルフと天使の血を受け継ぐとはいえ、彼女は享乐的なエルフの間で成長してきた。

ストイックな生き方を賞賛する気にはなれないのだ。

彼女は長命なエルフと寿命のない天使の血をもつ故に、これから何百年、もしかしたら千年以上生きるかもしれない。そんな彼女にしてみれば人間の数十年の人生など一瞬のまばたきに過ぎない。そんな貴重な時間を人生の喜びを感じずに生きるなんて、考えられないのだ。

だがポルメリアは、少なくとも二百歳は年上のフィスエシルを前に年長者のような態度で論じた。

「生きる喜びは人それぞれだと思いませんか。それに私は、私一人の満足よりも、他の人々の笑顔を見る事が幸せなんです。だから、貴女も笑って下さい。嘲笑でも構わない。皆が幸せになれるなら、それが私の幸せなんです」

ポルメリアは振り返らなかった。足の早い馬をもらいうけると、逸る心そのままにケルマディクへ発って行った。

様々な雑用を弟子達に押し付けたフィスエシルは背中の中白な翼をゆらゆらと不安げに揺らしながら、そんなポルメリアの後ろ姿を、執政宮殿の窓から見送った。その顔に微笑みはなく、やはり不機嫌な表情が張り付いている。

「望まれればどのような騎士でも貴女の護衛に回しますのに」

何時の間にやらカシユール・フォリヴァスがフィスエシルの後に立っている。彼女は振り返らなかった。

「私が知っているかぎりでは、天使の眷属は彼女だけよ」

「そして天使の血を引くのは貴女だけだ。身の回りを天使の眷属で固めたいのですか？」

「・・・わかんない」

「貴女はほんとうに天真爛漫な方だ」

「もっとはっきり言っているのよ？」

「子供のようですね」

「二百年以上生きているのにね」

「そんなにお気に召したのですか、あの生真面目で不器用な少女騎士が」

問われてフィスエシルはしばらく答えなかった。窓の向こうにポルメリアの姿はとうにない。

敵襲の後始末が窓の下では行われている。黒焦げになった悪魔の眷属たち。

その骸を撤去する作業が行われている。フィスエシルはそれを見ている訳ではなかった。

ただぼんやりと殺戮が行われたとは思えないほど平和な、小鳥のさえずりさえ聞こえてくる空を見ている。

「エンペランスという下級天使の騎士を知っている？」

『『エンペランス騎行』の？』

「そう」

「エンペランスが武勲を立てるヴァリエーションは宮廷吟遊詩人の詠唱を聞いた事がありますよ」

「あれ、どうやら私の父親に当たるらしいのよね」

何気なく漏らされた言葉の意味をカシユールは考えた。

そしてどう考えてもエンペランスがフィスエシルの父親であるという言葉でしかない事に気がついて、口ごもった。

「そ、そうですか」

「どういう意味？」

ここでようやく彼女は振り向いた。案の定、すごぶるご機嫌斜めだ。

「いや、初めて伺いましたから、驚きましたよ」

「似ていないって？」

彼女の質問にカシユールは苦笑いと沈黙で返した。『エンペランス騎行』には複数のヴァリエーションがある。大団円になるもの。相打ちで果てるもの。悲劇的な最期を遂げるもの。

さまざまあるが変らないのがエンペランスという下級天使の騎士の、愚直なまな生真面目っぷりだ。

冗談や諧謔を織り交ぜて、どれが本気か解らない話をするフィスエシルとは真逆の性格とあって良かった。

「まあ、話に聞く親父様の性格は野暮の極みっていうからさあ、母さんだって珍しいからちよっかいかけたってのが本音らしいね。

確かに会った事もない、正義馬鹿で、母さんとのロマンスよりも弱きを助ける戦いを優先した拳句、地獄の龍と戦って命を落としたようなロクデナシよ。

それでも父親は父親だし、あの娘を見ていたら、きつと親父様もこんな人だったのかなあ、とか思っちゃってさ」

話している間に不機嫌な彼女の顔が徐々に穏やかなものになっていく。最後には何処か寂しげな表情だ。

口では責めるような事を言っても、やはり父親の気配を感じ取りたいと思ひ、ボルメリアにこだわったのかも知れない。

「なるほど・・・しかし彼女は若い少女に過ぎませんよ。父親を感じるのは無理でしょう。

私だって、貴女の父親になる事はできません。恋人にならなれますがね」

カシユールは戸惑いから立ち直り、穏やかに笑う。フィスエシルは皮肉っぽく言った。

「社交辞令？」

「いいえ、本心ですよ」

「さあて、信じられるかしらね」

「愛していますよ、心から。

貴女にとつては瞬く間の昔、父上に連れられて初めてアンゲルウルプを訪れ、

貴女の姿を見た時から、私の心は貴女のものなのですから」

彼女はゆっくりとカシユールを見つめた。カシユールはそんな彼女を受け止めるように微笑んでいる。

「・・・一瞬本当かと思っただわ」

「信じて欲しかったのに」



フィスエシルの言葉は失礼そのものだが、カシユールは気に止めた様子もなかった。二人は言葉遊びに興じるような顔になっている。

「言葉だけでは信じられないわ。私が欲しければ、『天使王国』を救いなさい。それが私への愛の証よ」

「心得ました。それが貴女の望みなら、私は『天使王国』を、そしてテッラムリアを救いましょう」

宮廷人の言葉は実行に移されない限り全て冗談と受け取る癖がフィスエシルにはできてしまっている。二百年という歳月、そんな言葉ばかり聞かされてきたのだから当然かも知れない。

しかしそんな彼女でもカシユール・フォリヴァスという男だけは解らなかった。

何処までが本気で何処までが冗談なのだろうか。それでも今は、この男を信じなければならぬのだ。

テッラムリアに生きる最後の天使の一族として、彼女は形骸化しようとも『天使王国』を守らなければならない。その為には、どんな手段でも使うつもりだ。

彼女自身を欲する目の前の大貴族を焼きつけ、その気にさせ、悪魔の軍勢と戦わせなければならない。

持てるものといえば天使の血筋しかない彼女には、それだけが唯一の切り札だった。

ボルメリアならば天使の属性全てと、一人でも悪魔の軍勢と戦うだけの力を持っているだろうに。

フィスエシルはほんの少しだけ、つい先ほど立ち去った少女を羨ましく思った。その力とは裏腹に、何処までも不器用な彼女を。

ケルマディクは燃えていた。正確に言うならば、ケルマディクの領邦が燃えていた。

『王国都市』の称号を持つ自由都市ケルマディクは都市部のみがその領域ではない。

都市人口を支える農村部、商業都市がその安全保障を確保する為に必要な交通上の要衝、衛星都市とそれを支える農村部、それら全てがケルマディクという一つの国家を形成していた。

メルクスから溢れ、『天使王国』各地を侵食、掃討している悪魔の大隊が交通の要所、という事は攻め入りやすく人口が多く、

つまり悪魔たちが求める魂の狩場として最適なケルマディクに迫るのは時間の問題だった。

アンゲルウルプで開かれている諸侯会議に出席しているケルマディクの代表団はまだ帰還していない。

それでも豊富な財力と人材を誇るケルマディクは迅速に悪魔たちを迎撃する手筈を整えた。

悪魔にとつてはほぼ初めてといい、『天使王国』側の組織的な反抗だった。

最南端の要塞で足止めしつつ、領域内の領民をケルマディク、あるいは領外へ避難させる。

だが要塞の英雄行為は半日という時間を稼いだに過ぎず、

列強諸侯さえも避けるというケルマディクの領域は一瞬にして地獄と化した。

皮肉な事に、ケルマディクの都市そのものが防備を固める事ができたのは、

ケルマディク軍が悪魔たちを防いだからではなく、

ケルマディクに逃げ込む事ができなかった領民の魂を刈り取る事に悪魔たちが夢中になったおかげだった。

領民の犠牲によって防御を固めた事に忸怩たる思いがあるケルマディク指導層だったが、

しかしそれだけの効果はあった。アンゲルウルプに配置されているものと同じ効果、

いや、他次元の来訪者以外にも効果を発揮するところからすれば、

あるいはそれ以上の力を持つ防魔法陣が発動し、悪魔たちの先鋒は城壁に触れる事さえできずに弾き飛ばされた。

来訪者に反応するアンゲルウルプの魔法陣を知っている悪魔たちは、魔法で動く巨像を城壁に投入する。ゴーレムは魔法に対して完全耐性を持っている。どんな魔法もゴーレム自身を傷付ける事はできない。防御魔法陣は城壁の内部で構成されている事が多い。

ゴーレムで城壁を破壊すれば、悪魔の侵入を拒む魔法陣も破壊されるという寸法だ。

これに対してケルマディク側はゴーレムさえうがつ事ができる重金属のランスで武装した重装騎兵团を出撃させた。当然、悪魔たちも魔法陣の外へ出てきた騎兵团に襲い掛かる。

血みどろの激戦が展開されたが、重装騎兵团の狙いはあくまでゴーレムの撃破だ。

それさえすめば長居は無用と、早々に城門内に引き返してしまふ。

そして城門が開かれていても魔法陣がある限り悪魔は中へは入れないのだ。

もちろん悪魔の中にも魔法に長けた者はいる。彼らが必死で防御魔法陣の解呪に全力をあげる。

ゴーレムによる攻撃は、その時間稼ぎといったところだったのか。悪魔は疲れを知らない。

ゴーレムと重装騎兵团の戦いがあつたその日の晩、魔法陣を見守っていた魔術師たちが異変に気付いた。

それは一点に生じた一時的な中和だった。

だが血に飢えた・・・もとい魂に飢えた悪魔たちは、その一点の綻びさえあれば十分だった。

一個大隊六百体の悪魔が、その魔法陣が中和された一点の城壁に集中する。夜警の兵士たちはあつという間に圧倒された。

怒涛の如く城壁を破壊し市内へなだれ込む悪魔たち。駆けつけたのはケルマディクに傭兵として雇われた腕利きの冒険者たちだ。数は百人にも満たない。だが一騎当千の兵たちだ。魔法戦にも慣れている。

悪魔たちは一気に市内を蹂躪する、という訳にはいかなかった。

一進一退の攻防が続く間に、防御魔法陣は修復された。

侵入してきた時と同じ様に、今度は時間を巻き戻したかのように、潮が引いていくように悪魔は城壁の外へ締め出される。

一昼夜の激戦をケルマディクは戦い抜き、都市を守りぬいたのだ。

だがそれで安心できる訳ではなかった。悪魔は疲れを知らないのだ。

翌日から悪魔たちによる防御魔法陣の中和は頻繁に起こるようになる。一度中和した事で手順を知つたのか、それとも破壊された城壁に描かれた魔法陣の一部が消えた事で、元の強度が無くなってしまったのか。とにかく休む間もない悪魔たちとのせめぎ合いが始まった。

それに悪い事に戦いが始まって三日後には悪魔の数が確実に倍に増えている。もう一個大隊呼び寄せたのだろうか。

これによって悪魔たちは間断なく魔法陣を中和するだけではなく、

今まで一ヶ所を攻め立てていたものが二ヶ所、三ヶ所と攻め込む場所を増やし始めたのだ。

もちろんケルマディクの方も防御の手は怠らないし、援軍の手配も何人もの諸侯、いくつもの『王国都市』に使者を派遣している。だが援軍の答えはまだ帰らないし、休む事なく攻めてくる悪魔の軍勢に対して、人間やドワーフでは分が悪かった。

どのような魔法的手段を使ったとしても、疲労回復に一時間や二時間は必ず必要になる。悪魔にはそれすら必要ないのだ。

人間の呪文の使い手は必ず休息を必要とする。人が悪魔と戦うために魔法の援護は必要不可欠だ。

だから必ず守り手に休息は必要だった。

ところが悪魔ときたら、最下級の悪魔でさえも人に匹敵する戦闘力を持っているし死ににくい。

悪魔の呪文の使い手として休息を必要だが、その肉体だけでも凶器である彼らには、必ずしも魔法の援護は必要ではないのだ。

休息を必要とする人間、ドワーフ、エルフ、その他の諸族と、休息を取る必要が必ずしもない悪魔たち。

例えば数万対千二百の戦いでも人側に悪魔と対等に戦える戦士は数百も存在しないのだから、

長引けば長引くほど防衛側は不利となった。



最初の頃、吟遊詩人の師匠について旅から戻ったデイエスは、生まれ育った孤児院で昔馴染みの子供たちを励ます役目を担っていた。十二歳の彼は戦場に立つには幼すぎるのだ。

ところが戦いが始まって三日、四日が経つとそんな事は言っていられなくなる。僅かとはいえ、彼も戦士を励ます歌を歌えるし、人を癒す呪文も扱える。人手が足らなくなった前線で、幼い彼もそれなりの働きを求められる。

当初は力を求められた昂揚感や自尊心が子供心にも芽生え、精一杯努力し働こうと思った。

しかしそんな気概は初日で消えた。何もかも切りがないのだ。デイエスが覚えている治癒呪文はあつという間に底を尽きた。各神殿がケルマデイク市政府の援助で山と用意した治癒呪文をこめた魔法の杖が、次々に消費されていく。

一度は治療所の近くにおぞましい悪魔の群れが攻め寄せてきた事もあった。

比較的非力な小集団だったので、付近の兵士達で撃退はできた。だが被害は大きかった。

デイエスも歌で援護するが、その甲斐があるのかどうかさえ解らない。人が死んでいく。

つい先日まではそれは非日常的なものであった筈だ。

豊かなケルマデイクでは病死や老衰による死がほとんどで、

誰かに殺されたり殺したりする事はまったくといっていいほどなかった。

ところがそれが今では日常茶飯事だ。

悪魔という他次元の存在がもたらした死に満ちた非日常が、現実のものとして少年の目の前に広がっていた。

治療所は前線でも後方に位置している。

夜中であろうと何であろうと、城壁の方ではいつもどこかで戦いの剣戟が、叫びが、悲鳴が、絶望が響いている。

デイエスは交代で休みながら、それらの悪夢のような響きから耳を塞いだ。

こんな時にポリーがいてくれたら・・・。

デイエスは繰言のようにそう思った。

日にちにすればそれほど時間は経っていない。だが援軍は何処からもやって来ず、戦える者は日に日に減っていく。以前は都市内菜園だった土地に、戦いで死んだ人々の土饅頭の墓が連なっていく。

ケルマデイク城内で死んでいく者は増える一方なのに、城外の悪魔たちはまったく勢いを減らさない。

相変わらず律儀に突破口を何ヶ所も作り、城内へ侵入しようと試みている。

政府が決戦を試みようと考えている。そういう噂がいつしか広がった。

本当ならば外部からの救援軍と呼応して悪魔たちを攻撃しなければ勝敗を決する事はできない。

だが援軍の見込みがないままにジリジリと戦力ばかりが減らされていた。

このままでは時間の経過とともにケルマデイクは陥落してしまう。そうなる前に戦いの主導権を奪わなければならない。

そういう話になったのには訳があった。

魔術師たちの索敵の結果、悪魔の軍団の中に一際巨大な上級悪魔の姿が前線に現れるのが確認された。

その名前はカプノーザ。悪魔たちを率いる軍団長を務めている。

軍団長級の悪魔が前線に立つという事は、意外に悪魔たちの戦力も底をついているのかも知れない。

ならば、軍勢の統率者たるカプノーザを殺せば、今の形勢を打開できるかもしれない。つまりはそういう事だった。

密かに選抜された精鋭部隊が用意された。

百戦錬磨の冒険者、一騎当千の騎士、高位神官、魔術師。彼らがカプノーザが出現した戦場に投入され、彼を殺すのだ。

機会は意外に早く訪れた。昼夜区別無く攻め込んでくる悪魔たちだが、早朝、つまり人にとつてはもつとも戦いつらい時間を狙ってカプノーザを中心とする一団が城壁を越えたのだ。悪魔側にとつてもこれが決戦であるとの政府は判断した。

これでカプノーザを討ち取れば主導権を握る事ができる。大勢を挽回できると考えたのだ。

即座に精鋭部隊が投入された。虎の子の戦士たちを中心に数百人の迎撃部隊が立ち向かう。

最初は一進一退の攻防が続いた。だがすぐにケルマデイク側は、はめられたのが自分たちである事に気がついた。

カプノーザが率いる部隊は、最初は何の事はない中規模の悪魔たちの部隊だった。

上級悪魔と言えば巨体を炎に包まれたカプノーザ一体だったし、

他は精鋭の冒険者であれば二人で一体を倒せそうな中級悪魔以下の連中ばかり。

ところが、カプノーザを殺す為の精鋭部隊が投入されて乱戦に入ったところで情況が変わった。

いや、上級悪魔ばかりが十体あまりカプノーザの援軍として現れたのだ。一個軍団に上級悪魔は十人しかいない。つまりカプノーザは自身の配下にある上級悪魔全てをケルマデイク戦に投入した事になる。

カプノーザは自身が前線に出て、全体的な攻撃の手をやや緩める事で、

ケルマデイクに残された主力が自分を襲って決戦を挑む事を誘った、という事なのだ。

カプノーザの目の前に現れたのがケルマデイクの最精鋭部隊なら、彼らを殲滅すればケルマデイクに残された戦う力はなくなる。数万人の魂を狩りとする為だ。悪魔ならそれぐらいの詐術など朝飯前だった。

気が付いた時には遅かった。精鋭部隊と言っても中核の腕利き冒険者や重装騎士たちは十人前後。

彼らがカプノーザ一体と戦うならば勝ち目はあっただろう。だが今や敵の数は十倍になってしまった。

必勝の策が敗北へと変わった時、人々から戦う気力が失われた。

もはやケルマデイクはおしまいだ。

そんな恐慌が戦う人々の心を塗り潰そうとしていた時だった。

突然、空中から銀色の光のようなものが矢のように一体の上級悪魔に襲い掛かった。

一撃だ。たった一撃で恐怖を撒き散らす上級悪魔の巨体が粉碎され、そして悪夢のように消えた。

目の前で何が起こったのか、ケルマデイク側も悪魔側も一瞬理解できなかった。

その戸惑いの一瞬を突いて銀の矢は一本の黄金の鎖を振り払い、次の獲物に襲い掛かった。それも上級悪魔だ。相手の一太刀で深手を負った上級悪魔は驚きの咆哮をあげて巨大な野太刀をなぎ払う。

金の鎖のような一本の三つ編みが背中で揺れる。

野太刀はかすりもせず、銀の大剣を使う彼女は易々と上級悪魔の心臓をえぐった。

普通の兵士なら何十人束になったとしても勝てない上級悪魔が、あつと言う間に二体も屠られたのだ。尋常な事ではない。敵味方から驚きの声があがるのは当然だ。その声に答えず、彼女は次の獲物を探した。

それは攻め手の総大将、カプノーザだった。

「天使の小娘かつ」

カプノーザの得物は長い長い炎の鎖だ。それで相手を絡め取り、引寄せ、焼き尽くす。

しかし彼女の浮遊盾は炎の鎖を軽々といなす。彼女はその銀の大剣とともに光となってカプノーザの懐に踏み込む。激しい打ち合いの応酬が始まった。

上級悪魔の中でも一際巨大なカプノーザと、人間でも小柄な彼女との戦いはカプノーザが遥かに有利と見えた。

だが膂力に任せて戦うカプノーザと違い、彼女の剣は計算され尽くしていた。

一手一手が意味を持ち、一太刀一太刀でカプノーザの動きを封じ込める。そして、その度に致命的な傷を負わせるのだ。

「小賢しいんだよ、ガキが！」

カプノーザの体が炎で膨れ上がった。自分を中心にして炎の爆発を起したのだ。

周りにいた悪魔、人の区別無く、炎に耐性のない存在は焼かれ、火達磨になり消し炭になった。

彼女も焼かれた。それが怯みを生み、攻守が逆転する。かさに掛かったカプノーザが激しく炎の鎖を打ち込む。

彼女は完全に受け太刀になった。浮遊盾と銀の大剣で巧みに受け流すが、それでも炎の鎖で焼かれているのが解る。

一進一退の打ち合いが続く。彼女の乱入とカプノーザの爆発で戦場は混乱していた。

炎に耐性を持つ上級悪魔たちも統制を取る事ができず、単独で、あるいは数体の悪魔を引き連れてバラバラに戦うしかない。

ケルマディク側はもっと酷かった。炎に対して備えない兵士は一瞬で焼け死んだ。

カプノーザと戦う為、炎から身を守る手段のある精鋭たちも混乱している。

もはや戦線と呼べるものはなかった。酷い乱戦がケルマディクの城壁付近で広がっていた。

だからこそ、後方にいたデイエスも話を聞いてそこへ向かう事ができたのかも知れない。

「天使が空から降ってきて、一人でカプノーザと戦っている」

天使について歌う事、それがデイエスの吟遊詩人としての命題だった。

それは孤児院を旅立つ前に皆の前で歌った『エンペランス騎行』の事が頭を離れなかったからかも知れない、

時折孤児院を訪れる憧れの彼女が『天使の眷属』と言われているからかも知れない。

天使が一体降臨したからといって悪魔との戦いで有利になった訳ではない。いたるところで混乱が起きている。

それでも、彼は降臨した天使とやらを自分の目で確かめなければならぬと思った。

天使を歌うならば、その実物を目撃しないでどうするのか、という事だ。

戦いの混乱をすりぬけて城壁へと急ぐ。悲鳴と罵声、咆哮と泣き言。

様々な地獄を通り抜けてデイエスが見たものは、カプノーザと彼女以外には何も無い空間だった。

悪魔だろうがケルマディクの兵士だろうが、誰も一体と一人の間には入り込めそうになかった。

カプノーザは満身創痍で炎の鎖を振り、天使と呼ばれた彼女は火傷を負いながらも銀の大剣を振った。

彼女の傷は時間と共に急速に癒えていたが、体格差の不利は如何ともしがたかった。

カプノーザには圧倒的な膂力があつたが、負った傷を癒す事ができず、あたりに多量の体液を流し続けていた。

どちらにも決定的な手段がないようだ。どちらも自分よりも相手が早く倒れる事を願いながら武器を振っているようだった。

最初、カプノーザの影に隠れて天使の姿は見えなかった。

だが時折見え隠れする黄金の三つ編みが、デイエスの鼓動を早くした。

一体と一人はデイエスに気付いていない。いやこの戦場にいる誰もが子供の吟遊詩人見習いに注意を向けていない。

このまま固唾を飲んで見守るだけならばデイエスは誰にも気付かれずに逃げ出す事もできただろう。

だが打ち合いの度に舞う黄金の三つ編みを見た瞬間から、デイエスの口に自然と歌が込み上げた。

それは勇者を鼓舞する歌だ。戦いに赴く戦士を励ます歌だ。歌は彼女の耳に届き、彼女を鼓舞し励まし、新たな力を沸き起す。

彼女が雄叫び一つを上げた。沸き起こる力のままに鋭い切っ先をカプノーザに向ける。歌一つで形勢が変わった事をカプノーザは認めざるを得なかった。だがそれでこんな天使の小娘に負ける訳にはいかない。仮にも軍団を統べる上級悪魔が、天使のなりそこないに負ける訳にはいかない。

「もう一度焼き尽くしてやる」

カプノーザは自分を中心に炎の爆発を再び起すつもりだった。様々な攻撃に対して完全耐性を持つ天使だが、炎ばかりはそうはいかない。それに彼が発する爆炎は、邪魔な歌い手までも焼き尽くす筈だ。

何の前触れもなく地獄の炎を操れるカプノーザなら、吟遊詩人の子供一人殺す事など問題なかった。

だが歌一つで動きの良くなった銀の大剣の使い手は、その炎を呼び起こす事すらカプノーザに許さなかった。カプノーザの視線を浮遊盾で遮る。

目の前の敵を視界に納めていないと言う事にカプノーザは慎重になり、炎を呼ぶよりも浮遊盾を弾き飛ばす方を選んだ。盾に隠れた筈の彼女がいない。

何処にいるのか？と思う間もなく自分の肩の上に誰が乗った事を知った。狂乱するように炎の鎖を操るカプノーザ。だが雄叫びをあげた彼女の大剣がカプノーザの無防備な頭蓋を何度も殴りつける方が早かった。

一撃で頭蓋が割れ、二撃で首が砕け、三撃目で頭自体が胴体にめり込んだ。崩れた巨体が痙攣している。

彼女は止めを刺すようにカプノーザの心臓を貫く。それでようやく巨大な悪魔は動く事をやめ、そして消えた。

「ポリー！」

戦いが終わって歌う事をやめたディエスは溜まらず彼女に声をかけた。

戦いに汚れた顔を拭い、ディエスを認めた彼女は晴れやかに笑った。

「ディエス！立派な歌い手になったね。その歌のお陰で勝てたよ」

憧れている彼女に褒められてディエスの頬は赤くなった。だが彼女の方はそんな彼の相手をしている暇はなさそうだ。

「まだ敵はいる。話は後だ。戦いが終わったら皆のところに顔を出すから、そう言っておいて」

銀色に輝く大剣と浮遊盾を持ち、

金色の三つ編みをなびかせた彼女は爆炎と地響きが起きている方向を睨み、そう言い捨てて走り去ろうとしていた。

彼女にとつてもディエスはまだ守られなければならない少年なのだ。

十六歳になるうとする彼女と十三歳になる彼との間の歳の差など僅かなものに過ぎないが、そんな事は関係ないのだ。

彼女は十歳で騎士に叙勲され、十二歳からこっち、幾多の修羅場を潜り抜けた一人前の戦士、

いやケルマディクの孤児たちにしてみれば世に二人としない『英雄』なのだ。

翻ってディエスは、まだ師匠についている吟遊詩人見習いに過ぎない。

歳の差は三年でも見習いと『英雄』の差は天と地ほどもある。

この戦いがなかったら、ディエスは不満を覚えながらも彼女の言葉に従っただろう。

しかし彼も、数日の事とは言え、まさしくこの世の地獄を見てしまった。

今ここで、彼女を助ける為にその歌を歌った。それが彼の自負であり成長の証だ。

神殿で守られながら震えている孤児たちとは、もう違うのだ。その思いが彼の胸に沸き起こった。

「ボルメリア！」

愛称ではなく、その名前を呼んだのは初めての事かもしれない。デイエスに言われて彼女は不思議そうに振り返った。

「ぼ……俺もついていくよ」

「貴方を守る余裕はないかもしれないよ」

ボルメリアの清冽な藍色の瞳がデイエスの怯えた心を射抜いたようだった。だがデイエスは内心の恐怖を押さえ込んだ。

「ボルメリアは僕の歌で勝てたと言った。僕の歌にも力があるんだ。

お願いだ。一緒に行かせて。足手まといにはならないようにする……」

先ほどは『俺』といって自己主張したというのに、もう『僕』に変わってしまった。

心の底まで見透かすような彼女の瞳に見詰められると、束の間に沸き起こった自尊心など泡のように消えてしまいそうだった。

どれぐらいの時間が過ぎただろう。デイエスにとっては長い長い緊張だったが、実際は僅かなものだったに違いない。

再び地響きがしてボルメリアの注意はそちらに向く。デイエスの事に構う時間が惜しい様子だった。

「危なくなったら構わず逃げなさい。貴方が自分の事は自分で始末できるといふのなら……」

それだけ言うが早いのか、ボルメリアはスカートのようなサーコートを翻し、わき見もせず次なる戦場へと移っていく。ついていくと宣言したデイエスの事を気づかう様子はなかった。

むしろ振り切れば危険な目に会わずにすむとさえ考えているような急ぎっぷりだ。

どんな魔法の道具を使っているのか、

ろくな装備を身に付けていないデイエスの方が重装備のボルメリアを追いかけられるのがやっとなのだ。

それでもデイエスは必死になって彼女を追った。今まで彼女は憧れの対象でしかなかった。

だがカブノーザとの戦闘で彼女が言った言葉がデイエスを支えた。

自分でも彼女を助ける事ができる。彼女の役に立つ事ができる。彼女と共にいる事ができるのだ。

悪魔の咆哮が空気を揺らしても彼は恐怖を噛み殺した。彼女と共に戦う事ができるのだから。

手の届かない存在だった彼女に、デイエスは一步近づけたような気がした。